

# モンテッソーリ教育思想の誕生(2)

## 障害児治療教育から方法の基礎をえて

早田 由美子

ローマ大学の医学部を卒業したマリア・モンテッソーリは、約十年後の一九〇七年、「子どもの家」で華々しい教育実践を展開する。それまでの間、彼女は医学、精神医学、生理学、人類学、教育学、女性解放思想や社会主義思想など様々な学問や思想に影響を受け、独自の思想を形成していた。今回は、モンテッソーリが最初に影響を受けたイタール (Jean Marc-

Gaspard Itard, 1774-1838) とセガン (Édouard Seguin, 1812-1880) の障害児治療教育との関連でモンテッソーリの思想と方法の基礎を考えてみたい。

### 知的障害児治療教育との出会い

十九世紀後半のイタリアではまだ教育制度が十分整っておらず、性別や地域によって教育を受ける機会

はかなり制限されていたが、その中で、女性にも教育の機会が少しずつ開かれようとしていた。このような流れの中で、モンテッソーリは先駆的な役割を果たしていた。女子に中学校への入学がはじめて認められた一八八三年に、彼女は工科中学校に入学し、さらに、工科高等学校にも進んだ。一八九〇年にはローマ大学に入学し、その上、まだ、女性には入学が許されていなかった医学部へ様々な難局を乗り越えて進学し、ローマ大学で最初の女性の医学博士になったのである。それ以前にイタリアで医学を学んだ女性にはエルネステイーナ・パペル（一八七二年 ピサ大学）、アンナ・クリシヨフ（一八八五年 ナポリ大学）、ジュゼッピーナ・カッターニ（一八九〇年ごろ トリ



ノ大学）などほんのわずかな例があるだけである。

モンテッソーリは、医学部在学中から婦人科病院、小児病院、神経クリニックなどで助手を務めるなどして臨床的な経験を重ねた。また、精神病院にも通い、治療の対象になる患者を選ぶ仕事も行っていた。当時、西欧諸国では知的障害児のための養護施設が設置されている国もあったが、イタリアではまだ、障害児は精神病院に入院させられていることが多く、モンテッソーリは病院での知的障害児の様子を知ることになる。そこでは子どもたちが遊び道具もない殺風景な部屋に閉じ込められて一日を過ごしていた。発達を促したり、知的関心と呼び起こすような刺激はほとんど与えられていなかった。子どもたちの状況に触発されたモンテッソーリは障害児に対する関心を深め、研究を進めていった。その中で、イタールやセガンの治療教育に関する思想と実践に出会い大きな影響を受けることになる。

障害児に対する関心を深めたモンテッソーリは、一八九七年にトリノで開かれた全国医学会議や一八九八年刊行の政治評論誌『ローマ』誌上、同年九月トリノでの全国教育会議などで「知的障害者に対する適切な処置」や教育のもつ力の重要性を指摘した。

特に教育会議では「医学と教育学を結び付けていく発想」を提起するとともに、精神医学者ボンフィーク教授による障害児教育関連法の制定案を受けてモンテッソーリはいくつかの具体的な提案を行っている。

公立小学校における障害児学級の開設、専門的教師による障害児の個別教育、重度障害児のための治療教育の特殊学校設置、各地の師範学校における障害児教育の教授、大学に特別課程を設けての治療教師範学校教師養成などである。

また、モンテッソーリは一八九八年よりローマの特殊教師範学校の責任者として知的障害児への教育実践と特殊教育の教師養成を行った。その際、イタール

とセガンに関する研究をさらに深め、セガンの『知的障害児の精神治療、衛生法ならびに教育』や『知的障害児―生理学的方法による治療』を訳出し、イタールやセガンの感覚教具を実際に試した。「十年間における私の仕事は、イタールとセガンの四十年間におよぶ研究の集大成である」とモンテッソーリ自身も述べているように、モンテッソーリはイタールとセガン研究に基づいて教育思想と方法の基礎を築いた。

また、モンテッソーリは障害児治療教育研究に基づき、『教育学的人類学』(Antropologia pedagogica, 1910)の中で次のように述べている。「学校や教育学で求められている改革は、社会生活という環境に不適応を示す子どもを含む、発達過程にあるあらゆる子どもの保護を導くものである」。

モンテッソーリはこのように述べて、健全な子どもだけではなく様々な異常や逸脱を示す子どもを含むすべての子どもを視野に入れた教育の改革を提案した。

モンテッソーリは、イタールとセガンの治療教育についての研究と自分自身の障害児との関わりを基に、障害児や社会的不適応を示す子どもを含むあらゆる子どもを対象とした教育をめざすことになる。

### イタールやセガンの知的障害児教育

イタールやセガンの仕事は精神病者と知的障害児の歴史の中でどのように位置付くのだろうか。

フーコーの『精神疾患と心理学』（神谷美恵子訳）

によると、精神病者や知的障害者の歴史は十七世紀半ばまでの比較的自由な状態での生活から、十七世紀半ばにおける大収容施設への隔離収容と強制労働の時代、さらには十八世紀末の新たな社会的監視体制強化の時代へと移り変わったとされている。そしてこの最後の動きを進めたのが精神医学の祖として知られるパリのヴィセートル精神病院首席医師ピネルであった。フーコーは彼を一七九三年に「鎖につながれた人たち

を解放した」が、むしろ「道徳的な鎖」をはりめぐらすことで、「収容施設を一種の恒久的審判所のようなものに」変えたと位置付けている。

このピネルに対して野生児の教育をめぐる異論を唱えたのがイタールであった。フランスの聾哑学校医師であったイタールは、一七九九年にコースヌの森で見つかったいわゆる「アヴェエロンの野生児」を対象に教育を試みた。この野生児をめぐる、ピネルとイタールは対立した。ピネルが野生児も知的障害児も「いかなる社会の力も教育をも受け入れない」と主張したのに対して、イタールは野生児を仲間との関係や教育を奪われ、孤独な生活の中で育った子どもと捉え、その教育可能性を見出そうとした。そして、1、社会生活への適応 2、感受性の覚醒 3、概念領域の拡大 4、言語の使用 5、心理的作業を中心とする計画を立てて教育を行った。

しかし、この野生児は純粹の野生児というよりも知

的障害児であつた可能性が強く、イタールも後にその点を意識して計画を立て直し、感覚機能の成長、知的能力の開発、感情の発達の三段階から成る生理学的方法に基づく第二実験を試みた。イタールは、個々の感覚の働きが観念の発展のために強力に作用すると捉え、それを「医学的教育」として応用しようとした。

彼は知的能力の発達には聴覚が最も貢献すると捉え、それだけ孤立させて訓練するために目隠しして音を識別させた。また、触覚を用いて、すなわち、手で触ることで温度差や物の形を弁別させた。さらに金属の文字を視覚的に識別する方法で読み書き教育を行った。

感覚を個別に用いながら、注意、比較、模倣、記憶などの行為によって知力を寛まし、観念の範囲を上げようとした。そして、イタールは、一定の知性を身につけた野生児に「自己的でない感情、もっと包容力のある感情」、「寛容な感情」をも確認した（J・M・G・イタール『アヴェロンの野生児』古武彌正訳）。この

ようなイタルの試みは知的障害児に対して生理学的方法で実際に教育した最初のものであつたと言える。

セガンはイタールから刺激を受け、彼を「哲学的目標と生理学的手段をもつて精神薄弱児の教育をした最初の人」と位置付け評価したが、体系的な欠点という点で批判した。そして、セガン自身は障害児治療教育の体系化をめざした。彼は、一八三九年における知的障害児学校の開設、一八四一年のサルペトリエール院での実践、一八四二年末のビセートル院内での教育などを通して、子どもの障害や能力に合わせた内容と方法を実証的な方法で探し出そうとし、知的障害児の訓練に生理学の原則を体系的に適用する可能性を模索した。そして、モンテッソーリはイタールとセガンの思想と方法を基盤に障害児治療教育を進め多大な成果を上げた。

このように見てくると、フーコーが位置付けた、ピネルまでの施療院での動きとイタールにはじまりセガ

ン、モンテッソーリへと発展する医学的教育あるいは治療教育の流れとでは、決定的に異なることが分かる。すなわち、この三人は教育の対象として認められていなかった知的障害児に教育可能性を見出し、実際に治療教育を試みた点で新しい流れを作った。

また、イタール、セガン、モンテッソーリの試みは、西欧哲学の流れの中でもエポックメイキングなものであった。西欧哲学には感覚と知性を結びつける思想が伝統として存在していたが、医師であったこの三人は、それを理念の域にとどまらず、知的障害児治療教育の具体的方法として生理学を用い、個々の感覚を個別に訓練する方法を工夫した。彼らは個々の子どもの反応を確かめながら提示の仕方や働きかけ方を工



夫し感覚を多様で具体的な形で刺激して興味を喚起し、感覚を練磨させながら知力のアップを実際に図ろうとしたのである。

### セガンからの発展

では、イタール、セガンの思想や方法を受け継いだモンテッソーリにはどのような独自性があったのであろうか。

まず第一に、知的障害児の問題を医学の分野ではなく教育の分野の問題として捉えた点にある。

モンテッソーリはこれについて『科学的教育学の方法』(*Il metodo della pedagogia scientifica applicato all'educazione infantile nelle case dei bambini*, 1909)で次のように述べている。

「私は同僚とは異なり、知的障害は主に医学上の問題であるというより、むしろ主として教育学上の問題であると直感していた」。

病気の治療において医学と教育学が提携するという  
当時わずかだが動き出していた流れの中で、モンテッ

ソーリは知的障害児の問題を医学よりもむしろ教育学  
の問題として教育の中で行われるべきであると捉え  
た。イタール、セガンはいずれも医師であり、障害児  
に教育可能性を見出して治療教育を行ったが、医学か  
教育かという区別をそれほど重視せず両者の併存を志  
向していた。セガンが晩年の代表作『知的障害児―生  
理学的方法による治療』の題名に「教育」ではなく  
「治療」という言葉を選んでいることなどをみると、  
むしろ医学の領域での治療という傾向が強いことがう  
かがわれる。

モンテッソーリも最初は医師として治療教育あるい  
は教育的治療 (*didattica clinica*) として捉えていた。  
しかし、彼女はそこから発想の転換を行った。すなわ  
ち、知的障害児の問題を医学の問題としてよりむしろ  
教育学の問題として捉え、生理学という医学的方法を

治療ではなく教育の方法として用いて新しい境地を切  
り開くことになったのである。

モンテッソーリの独自性は、第二に、子どもの興味  
や関心に合わせてセガン等の教具と方法に少しずつ改  
良を加えて自らの教具体系を確立した点にある。

セガンの試みた具体的方法には「筋肉に対する訓  
練」、「歩行力と平衡性」「注意力集中」のための作  
業、「比較的対照」、「繰り返し」、「手を用いる作業」  
（積み木、ボタンはめ、紐結び、はめ込み板、くぎ  
板、豆やピンつかみ、玉の糸通しなど）などがあり  
（E・セガン『知能障害児の教育』中野善達訳）、そ  
れらはモンテッソーリの教具の方法の原型となった  
が、彼女はさらに別の要素を加えて工夫した。例え  
ば、セガンのはめ込み板は円形、三角形、四角形、多  
角形、立方体、円筒、ピラミッド型、円錐、十字型な  
どをはめ込む形になっていたが、モンテッソーリは、  
その直径や高さや重さに変化をもたせた。

モンテッソーリがイタルやセガンよりも力を入れたのは、読み書きの教育という面である。モンテッソーリは、セガンの研究の中で読み書き教育は、「最も不十分に扱われている」と捉え、独自の方法を模索した。セガンもこの分野に全く関心がなかった訳ではなく、「線を描くのに必要な安定した力と正確さを与えた後、鉛筆を持たせる」ことや、また、「浮き彫りにしたアルファベット」によって、触覚を用いて文字を確認する作業などを考案している（E・セガン『障害児の治療と教育』末川博監修、薬師川虹一訳）。モンテッソーリはそれらの方法を実際に子どもに用いて反応を確認し、それぞれの教具を通して学ぶ内容を簡素かつ明確にするなどの工夫を加えて子どもの興味を



継続的に引き出せるようにして発展させた。

モンテッソーリは知的障害児が教育によって知的能力が向上することを確認し、さらに知的障害児が公立小学校に入学するという成果を上げた。このため、障害児教育の方法を普通児に適用すれば「かれらの人格は驚く程、発達し伸びて行くであろうと徐々に確信」するようになり、ここからモンテッソーリの第三の独自性が生まれることになった。すなわち、生理学的方法を障害児だけではなく、健常児に修正しながら適用した点である。彼女は一九〇七年、ローマのスラム街に開設された「子どもの家」でこれを実践に移し、さらに次のステップへと進むことになった。

（甲子園短期大学）